

## 編集後記

『医食同源』という造語は、体に良いものを摂取すること、病気を治療することのいずれもヒトの生命を養い、健康の維持・増進に必要な不可欠で、源は同じであることを意味する。もともとは、古来中国で体に良い食材をふだんから摂取して健康を保てば、特別な薬は不要であるという『薬食同源』から派生したものとされている。ところが、食に関して、生産地を偽ったり、期限切れのものを再使用したりといった事件が報道されたことは記憶に新しい。消費者を騙して富を得ようとする魂胆については許しがたく、言語道断である。一方、医学の領域でも、データを捏造・改ざんした論文が発表されたというニュースが時に報じられるが、事実を歪曲してまでも功績を挙げようとする野心も非難を浴びることは論を待たない。いずれの話題も一步間違えばヒトの生命に影響を及ぼす可能性があり、笑い事では済まされない。『医食同源』がこのようなことに転用されないようにと、日常診療に携わるもの一人として願っている。

本会誌編集委員会では、現在『どのような工夫をしたら原著論文が多く掲載された雑誌にできるか』が重要課題の一つになっている。アメリカ合衆国の医学界には、『症例報告は臨床医としての義務であり、研究論文ではない。リサーチ・マインドを涵養するには原著論文の作成が重要である。』という基本理念があると留学中に教えられたことを今さらながら思い出した。ただ、原著論文ではポジティブデータがないと採用されないという不文律が立ちはだかり、多くの医師（研究者）が苦慮するわけであるが、実験的研究においても臨床的研究においても、数多くのネガティブデータの中からほんのわずかな宝物（ポジティブデータ）が生まれてくるのが常である。すなわち、廃棄処分となるような膨大なデータが基盤にあって、初めて斬新な研究仮説や度肝を抜くようなアイデアが生まれてくることを念頭に置く必要がある。本来の医学研究の最終ゴールは、診療に還元できる成果を出すことであり、功績を上げるためや当該研究領域の先陣争いを制するために行なうものではない。データの捏造・改ざん、合併症をきたしたり不幸な転帰をとった症例の統計解析対象からの削除などは厳に慎むべきことである。辛口エッセイになってしまったが、会員諸氏が原点を忘れることなく原著論文作成に積極的に取組んでいただきたいと念じている。

(杉山保幸)